

# 神のシケプリシリーズ<sup>1</sup> 2008 年度冬学期 政治Ⅱ（前半）

## 1. 政治 (politics)

### (1) 「政治」の定義

- ・「政治」のイメージ→ 社会における問題を解決する（政策としてのイメージ）  
社会秩序をつくり出す（統治としてのイメージ）  
権力を求めて闘争する（闘争としてのイメージ）

…では、今までどのように定義されてきたのか？

#### ①公的意思決定過程に関わる人間や集団の行為や相互関係（政治過程）に着目する見方（利益中心の見方）

それぞれの利益の最大化を目指して、公的意思決定過程に影響力を行使しようとする個人や集団の競争的活動<sup>2</sup>

※利益集団の活動に注目して政治をみる多元主義論(pluralism)の見方。

#### ②権力中心の見方

- ・権力の形成と配分（Halord D. Lasswell<sup>3</sup>による見方）
- ・コントロール、影響、権威を多くの程度において含む人間関係の持続的パターン（Robert Dahl による見方）

#### ③ある社会に対する「価値の権威的配分」(David Easton)

その社会の大部分の人々にとって拘束的なものとして受け取られる<sup>4</sup>決定によって配分される。

価値とは典型的には金銭的価値などを考えればよい。

以上①～③は政治を遍在化（どこにでもあるものと）して考える見方。例えば権力関係は学校内や会社内にも家庭内にもみられる。

#### ④公共性を重視する見方

政府の「政治」とその他の「政治」の違いは公共性である。

- ・ Bernard Crick の定義

「政治学」：「社会全体に影響を与える利害と価値を巡って生じる紛争についての研究であり、またどうすればこの紛争を調停することができるかについての研究」

---

<sup>1</sup> (笑)

<sup>2</sup> 例えば、政治家や利益集団が族議員や政治団体に圧力をかける、など。

<sup>3</sup> Rasswellは政治学に精神分析学を取り入れたことで有名。

<sup>4</sup> 「政府が税金払えと決めたのだから従うべき」などという風に。

「政治」：「与えられた統治単位内における諸利益の対立を、それぞれの利益が共同体全体の福祉と生存に対して持つ重要性に応じて、権力に参加させつつ、調停するところの活動」

このように公共性で区別している。

政治権力は公共の利益を実現することを期待されているので、全ての人を服従させることができる。

※そもそも政治の語源は…

politis < polis (古代ギリシャの) ←全体の利益を考えて行動することを求められている、公共の事柄に関わるもの（家族など私的なものとは質的に異なる）

・佐々木毅による定義：

「自由人<sup>1</sup>からなる一つの共同体の中での公共的利益に関わる権力を伴った、多元的主体の活動」

→よってここでは次のように定義する。

・内山融による定義：

「公的権力によって、多元的な利益・価値<sup>2</sup>を調整・統合<sup>3</sup>し、公共の利益を実現する活動」

…つまり、公共事業、治安維持など独りではできない公共の利益を公的権力によって実現するということ。

※ところで、これは政治の姿をありのままに叙述した叙述的概念ではなく、政治はこうあるべきだという規範的概念である。

規範的概念を考える意味…現実の政治を表す唯一の正しい定義は存在しない。事実が先にあってそれに対応する概念があるわけではない。あらゆる概念には特定の価値観、perspective が入り込んでしまっている。ある概念にある一定の定義を与えるということは、特定の perspective や価値観に基づいて（その人が重要だと思う側面から）現実を切り取るということ。

というわけで「政治とはどういうものか」というのはその人が政治をどうあるべきかと思っているかに関連している。そういう意味で政治の定義は極めて規範的な

---

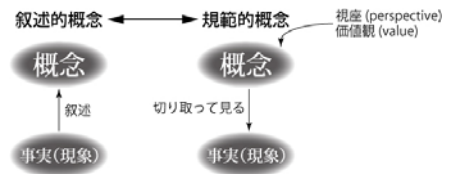
<sup>1</sup> 佐々木は、公共性が成立する前提はその共同体のメンバー全員が自由であること、支配者と被支配者が平等であることであるため「自由人」にこだわっている。

<sup>2</sup> 「利益」とだけ言うとう物質的なものだけを指すように感じられるが、実際は精神的な利益も含んでいるため「価値」という言葉を付け加えている。

<sup>3</sup> 「調整」というとすでに認識されているものについて何かするという受け身のイメージだが、実際には主観的に認識されていない利益を認識させること（例えば税金を払うことは一見不利益だが、政治家が「国を発展させるには税金が必要だ、増税も長い目で見れば利益になりうる」と説得させること）も政治の役割であるので、利益・価値を創造するという積極的な姿勢のイメージを持たせるため「統合」という言葉を用いている。

営為なのである。

逆に言えば、ある概念に対して新たな定義を行うと、それまで見ていなかった現実の新たな側面を認識できるようになり  
(政治を公共の利益という視点から定義することによって政治の果たすべき役割が見えてきて、政治の問題点が見えてくる)、批判や改革を行うことができる。よって色々な角度から政治をみて再解釈を繰り返すことが大事である。



## (2) 「政治」と「行政」

### ●主体に着目した見方（形式的）

政治…政治家の活動、すなわち公選職<sup>1</sup>

行政…官僚の活動、あるいは官僚で構成されている行政機関

### ●機能に着目した見方（実質的、理念型）

政治…諸利益・諸価値の調整・統合

行政…調整・統合の結果を実現<sup>2</sup>

### ●政官関係<sup>3</sup>

○官僚優位論：官僚が戦前からの特権を利用して優位に立っている。

○多元主義論（政党優位論）：官僚以外にも多元なファクターが権力をもっている。たとえば政治家は法案作成や予算決定において官僚よりも優位にある。

#### ・族議員の活動

族議員とは一定の政策分野に専門化し、その分野において政策決定に大きな力をもつ議員のこと。官僚に対して政治の方が優位であるとされる理由の一つ。

ただし、政策の枠組みを作るのが官僚で、政治はその利害調整をするものであり、その意味では族議員の活動は行政であるため、「行政的政治家」ということもできる。同様に「政治的官僚」もありうる。

<sup>1</sup> 国会議員、大統領、政治機関など。

<sup>2</sup> 政府が政策の決定・統制をするとすれば、行政はその立案・執行を担当する、という分類。ある種相対的な分類といえることができる。

<sup>3</sup> このように政治と行政を分ける意義であり、政策決定において政党と官僚のどちらが優位であるかについての議論。

## 2. 政治システム論 (political system)

### (1)政治システム論(David Easton)

政治というものを一つのシステム<sup>1</sup>としてとらえる考え方。

#### ●政治システム

「政治的と呼ばれうる具体的な社会活動の統合的に関連づけられた諸側面を確認する為に設計された分析的用具」

つまり要するに政治を抽象化・概念化して科学的に分析する為の道具であり、入力を出力に変換する装置のこと。代表的な行動論の考え方。

#### ●政治システムの3層

##### ○決定者(authorities) (=政府)

価値の権威的配分を具体的に行う当事者。

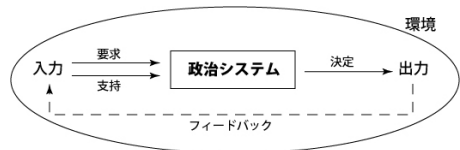
##### ○体制(regime)

要求が解決される（決定が行われる）方式を定めた一定のルール<sup>2</sup>。

##### ○政治的共同体(political community)

同じルールを共有する人間の集団<sup>3</sup>。

※決定者・体制が変わるのは政治システムの変化だが、政治的共同体が崩壊すると政治システムの崩壊となる。



#### ●環境

政治システムの外のシステムのこと。社会内環境<sup>4</sup>と社会外環境<sup>4</sup>に分けられる。政治システムは社会内環境のサブ（下位の）システムである。

#### ●入力

##### ○要求(demand)

問題の処理・解決を要求するもの。言い換えれば、特定の問題に関して権威的な価値配分が決定者により行われるべきである（ない）という意見の表明。

政治システムにとって圧力(stress)となり、増えすぎると過負荷(overload)となり、要求に応えきれなくなって政治システムに対する支持がなくなる。そのため、要求をふるいにかける装置(gatekeeper)が必要となる。政党・利益集団・マスメディアがその役割をはたす。要求を整理・変形して stress を弱める働きをする。

##### ○支持(support)

<sup>1</sup> システムとは相互に関連をもつ諸要素によって構成された統一的全体のこと。

<sup>2</sup> 憲法上の原理（衆参二院制など）など。

<sup>3</sup> 日本、日本人などという単位。

<sup>4</sup> 生態系システム、パーソナリティのシステム、経済システム、文化システムなどが社会内環境の例。国際政治システム、国際社会システムなどが社会外環境の例。

政治システムに対する協力的・賛成的な態度。

- ・ 一般的支持(diffuse supports)

全体としてのシステムやシステムの共有する規範に対する支持。個々の出力に関わりなく構成員がシステムに対して忠誠心や愛情を持つため、3層のいずれにもこのタイプの支持は向けられうる<sup>1</sup>。

- ・ 特定支持(specific supports)

個々の出力（政策）に対する支持<sup>2</sup>。

※システムのメンテナンスには一般的支持が重要。そのため政治的社会化（その社会で共有されている価値観・態度を習得し、同化・内面化すること）が必要。つまり教育によって人々がシステムに正統性を感じるようにする<sup>3</sup>。

### ●出力とフィードバック

出力：政策（諸価値の権威的配分あるいは拘束的決定およびそれらを実行する為の装置）

フィードバック：出力がもたらした影響について認識する過程

- システムそれ自体と環境の現状についての情報入手<sup>4</sup>

- 構成員の支持と現状についての情報入手<sup>5</sup>

- 出力の効果についての情報入手

フィードバックによりシステムへの入力に変化するため、フィードバックの感度がよいことがシステムの存続に重要となってくる。

### ●批判

政治システムの存続が重用視されるということは、現状維持が重視されるようになり、保守的な議論になってしまう。また、環境とシステムの関係に注目しているが、政治システムの内部構造は軽視されており、体制変化などに対する問題意識があまりない。

## (2)サイバネティクス論(Karl W. Deutsch)

### ●サイバネティクス(cybernetics)

組織におけるコミュニケーション（通信・情報）とコントロール（制御）の科学。

あらゆる組織はコミュニケーションによって統合されており、自己制御する。

※政治は権力の問題というよりも「操縦(steering)の問題」。そして操縦は決定的にコミュニケーションの問題である。

---

<sup>1</sup> 日本政府に対する支持、日本国憲法に対する支持、日本そのものへの支持など。

<sup>2</sup> 定率減税に対する支持、消費税引き上げに対する支持など。

<sup>3</sup> 例えば、大統領に対して理想的なイメージを子供に持たせる、という風。

<sup>4</sup> 現在の経済状態はどうなっているか、失業率はどれくらいか、など。

<sup>5</sup> それについて国民はどう思っているか、など。

※ちなみに Deutsch にとって政治システムとは組織のことで、政府と同じものとしてとらえられる。

### ●フィードバックによる学習と自己制御

政治システムはフィードバックによって学習、自己制御を行う。正のフィードバックと負のフィードバックに分けられる。

#### ○正のフィードバック

フィードバックされた情報が最初の行動を増幅するもの。同じ方向の行動を強める

<sup>1</sup>。ある意味病理的であり、マイナスの方向に増幅しすぎると革命やクーデターが起こってシステムの崩壊を招く恐れがある。

#### ○負のフィードバック

フィードバックされた情報が目標の達成に向けてシステムの行動を変更・修正するもの<sup>2</sup>。目的追求フィードバックと目的変更フィードバックに分けられる。

##### ・目的追求フィードバック

目標を固定したままで手段だけを変えること<sup>3</sup>。→「単調な学習」に対応する。

##### ・目的変更フィードバック

システムの目標そのものを変化させること<sup>4</sup>。

システムの様々な要素を再調整する必要がある。→「複雑な学習」に対応する。

価値の変更という conflict を通じてシステムの自己変革が行われ、政治システムの成長につながる。

### ●批判

「操縦」が重視されているため、エリート主義的、テクノロジー的な色彩が強い。権力などの大事な問題が軽んじられているのではないか。

## (3)構造機能分析と政治文化論(Gabriel A. Almond)

### ●構造機能分析

あるシステムにおいて、いかなる構造がいかなる機能を担っているかについての分析。

アーモンドは政治システムの共通特性を次のように考えた。「あらゆる政治システムには政治構造があり、システムの発展に伴い分化する<sup>5</sup>。一方あらゆる政治システムに

---

<sup>1</sup> 例えば貧富の差が激しく国民の不満が強い国で、政府が強権的に抑圧を行うと、さらに国民の不満が高まる。それにもかかわらずまた軍隊を用いて抑圧するようなもの。あるいは酒を限度以上に飲んでしまう人に限って、もっと飲める気がしてグイグイ飲んでしまう感じ。破滅的な結果が待っていることは言わずもがなである。

<sup>2</sup> 酒がヤバいと思ってきたら飲むのをやめるのがその例。

<sup>3</sup> 例えば、経済成長率5%という目標を設定して経済政策をとるが、なかなか効果が上がらないので財政政策もとるとき。

<sup>4</sup> 上の例でいえば、効果が上がらないので3%に変えるとき。

<sup>5</sup> 例えば、昔は王が全てやっていたが、次第に議会・裁判所・内閣に権力が分化していった。つまり多機能的で

においても同一の機能が遂行されている」。

○基本的構造（最も文化の進んでいる欧米の政治システムを例に）

- ①選挙民とコミュニケーション・メディア
- ②圧力団体（利益集団）
- ③政党
- ④議会
- ⑤政府と官僚制
- ⑥裁判所

このような期間が入力機能や出力機能を担う。

○入力機能

- a)政治的社会化と補充（政治家や官僚、選挙民・有権者の養成）…特定の構造というよりも、システム全体によって達成されている。
- b)政治的コミュニケーション（世論を政府に、政策を国民に伝える）…①に対応。
- c)利益表出（「このような政策を実行してくれ」という形で利益を表出する）…②に対応。
- d)利益集約（表出された様々な利益をまとめあげる）…③に対応。

○出力機能

- e)ルールの作成（立法）…④に対応。
- f)ルールの適用（法律の執行）…⑤に対応。
- g)ルールの裁定（運用が法律に合致しているかを裁定）…⑥に対応。

## ●政治文化論（Sydney Verba と共同）

政治文化：政治的対象に対する指向のパターン。

指向は意識とも言い換えることができ、認知（知識があるかどうか）、感情（好きか嫌い）、評価（判断や意見）の三つの次元がある。

指向の政治的対象には次の4つがある。それぞれに認知・感情・評価の三つの次元が存在している。

- 一般的対象としての政治システム全体：政府、政治の仕組み
  - 入力対象：政党、圧力団体など
  - 出力対象：行政機関、その政策
  - 参加者としての自己：政治に参加する主体としての自分自身にどういう役割を認識しているか（積極的に参加するか、関係ないやと距離をおくか）
- Almond と Verba はさまざまな国の国民がこの四つの対象に対してどのような指向

をもっているか調査し、それによって政治文化を大きく三つに類型化した。

	政治システム	入力対象	出力対象	参加者としての自己
未分化型	0	0	0	0
臣民型	1	0	1	0
参加型	1	1	1	1

＜凡例＞ 1…積極的な関心あり 0…積極的な関心なし

未分化型…政治に対してあまり関心をもっておらず、入力がどのようなものか、出力がどのようなものかについてよく知らなければ、政治に参加する自己としての認識も低い。イタリアがその典型<sup>1</sup>。

臣民型…政治システム全体とか政策のような出力に関しては関心があるが、政党などの入力や参加者としての自己認識はない。これらのことに関心を持つにはかなりの積極性が必要とされるが、それほどまでには積極性はないということになる。典型はドイツ。

参加型…全ての対象に対して高い関心を持っている。自分の国の政治のあり方に関して高い知識をもっており、積極的に評価をしている。典型はアメリカ。

※多くの国はこのような典型的なタイプには当てはまらず、複数のタイプが混合している。最も理想的なのは臣民型と参加型の混合形態。市民が政治家を尊敬し、恭順する。かといって完全に受け身ではなく、政治システムや入力に対してもそれなりの興味をもっているタイプ。このような文化を市民文化(civic culture)とよぶ。このような市民文化をもっている国の典型がイギリスであり、政治的な安定性が高い。

#### ○批判

政治文化が個々人の政治意識に還元されすぎている。個人の政治意識だけでは政治文化はとらえきれない。

また、類型化が近代化の発展段階に対応していると考えられているが、アメリカやイギリスが最も近代化されていて、その他は少し後れた段階だという認識が背景にあり、この考え方だと「近代化が進めば他の国もイギリスやアメリカと同じになる」という終焉仮説が生まれる。しかし国の発展には様々な経路があり、このような発展段階説には問題があると言わざるを得ない<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> あくまで彼らが調査した時代である 1960 年代の話。

<sup>2</sup> もっとも、このような批判は一時の政治学に対する批判として典型的なものである。



### 3. 権力 (power)

権力…一般に、Bの望まないことをAがBに行わせるとき、A B間には権力関係が成立すると言うことができる。

#### (1)代表的な権力論

①Charles E. Merriam<sup>1</sup>

##### ●権力の生誕と死

「権力は、集団の統合現象であり、集団形成の必要性や有用性から生まれる<sup>2</sup>」

具体的には、権力を生み出すのは次の三つの要因である。

- 1)社会諸集団の間の緊張関係…組織化された政治的行為を生み出す
- 2)パーソナリティの諸類型…社会生活の調整と適用の必要性
- 3)権力追求者や指導者…1 や 2 に対応しようとする、政治行為を組織化していく  
…要するに、対立や紛争を調整する必要性から権力は生まれる。

一方、集団の間の不均衡、パーソナリティ間の調整不全、政治社会の基本的機能遂行の失敗<sup>3</sup>などがあったとき、すなわち社会変化の傾向に権力が適応できないときに権力は死ぬと考えられる。

##### ●権力の表と裏

###### ○表の面

権力を心理的に補強する手段。つまり権力を飾ることによってその安定をもたらすもの。

###### ・ミランダ：賛嘆されるべき様々なもの

大衆の情緒や感情に働きかける、非合理的な側面を持つ。

権力の威容を示す、国民の愛国心を高める

具体的には…記念日および記憶に残されるべき時代、公共の場所および記念碑的な道具、音楽や  
歌曲、旗・装飾品・彫像、制服などの芸術的デザイン、物語や歴史、念入りに仕組  
まれた儀式、行進・演説・音楽を伴った大衆的示威行為、建物など

###### ・クレデンダ：信仰されるべき様々なもの

大衆の知性に訴えかける、合理的な側面を持つ。三つの形態がある。

---

<sup>1</sup> 1934年に『政治権力』を出版。アメリカの数多くの政治学者を生み出し、「現代政治学の父」とよばれる。権力に関する現象を叙述することによってその特質を浮き彫りにするという色彩が強い。一般的な権力というより政治権力を中心に分析した。

<sup>2</sup> 例えば古代社会においては川が氾濫するから堤防を作ろうとか橋を架けようとかいうときに、一人ひとりがバラバラでは何もできないが、誰か一人が人々をまとめ上げるリーダーとなることによってその目的を達成することができる。

<sup>3</sup> 戦争によって国が減びるのが典型的な例。

1)政治権力は神によって定立されたもの<sup>1</sup>

2)政治権力は卓越したリーダーシップ（カリスマ）の最高度の表現

3)政治権力は何らかの形の同意を通して表現された多くの人々あるいは多数者の意思

#### ○裏の面

暴力、残忍さ、偽善、汚職、硬直性など。

#### ●支配者に必要な権力の技術

社会的構成についての正確な知識、政治的な褒章・昇進をそれぞれの集団や人物のサービスの度合いについて分配、賢明な妥協、リーダーシップがあることの証拠を示すこと、正義と秩序の均衡、自己放棄・自己犠牲<sup>2</sup>

#### ②Harold D. Lasswell

権力そのものの分析—価値に注目して権力を捉えた。

権力関係：「ある行為の型に違反すれば、その結果、重大な価値剥奪が期待されるような関係」

#### ●尊敬価値と福祉価値／基底価値と目標価値

尊敬価値：権力、尊敬、道徳、愛情

福祉価値：健康、富、技能、知識

価値を手に入れるためには他人をコントロールする必要があるが、その手段としても価値が重要なものとなる。すなわち、人間はある価値の保有を基礎として他人に価値を賦与したり他人から剥奪したりすることによって他人の行動をコントロールする。このとき、手段となる価値を基底価値(base value)、目標となる価値を目標価値<sup>3</sup>(scope value)という。

上に挙げた8つの価値が基底価値にも目標価値にもなりうる<sup>4</sup>。すなわち $8 \times 8 = 64$ のパターンに分けることができる。

#### ●政治的人間

様々な価値の中で権力を第一に追求する人間のこと。Rasswell は精神分析学の手法を用いて政治的人間のパーソナリティが形成される過程を分析し、次のように公式化した。

---

<sup>1</sup> 戦前の天皇制や王権神授説など。

<sup>2</sup> 政治家は利他主義を身に着けているべきであるということ。また自己犠牲は被支配者の側にも必要である。つまり大衆の自己犠牲の精神に訴えかけることが重要。Merriamによれば「国家の構成員が『なぜ国家の為に何かをなさなければいけないのか、国家は我々の為にこれまで何をしてきたのか』と平然と問うような状態に立ち入ったときには国家の命運は尽きている」という。

<sup>3</sup> 本によっては「範囲価値」と訳しているものもあるが、それではちと意味が変なのでこう訳しておく。

<sup>4</sup> 例えば権力を使って市民から富を巻き上げることもあれば（この場合権力が基底価値、富が目標価値）、逆に金で権力を買う場合（富が基底価値、権力が目標価値）もある。

$$p \} d \} r = P$$

( $p$ : 私的動機<sup>1</sup>  $d$ : 私的動機の公的目標への転位  $r$ : 私的動機の公的象徴による合理化  $P$ : 政治的人間)

政治的人間には3つの類型がある。

#### ○激化型

他人から注目を受けて情緒的な反応を得ようとする。自己顕示欲が強く、他人をあつと言わせるのを好む。大衆を動員する扇動家を生み出しやすい。ヒトラー、小泉純一郎など

#### ○強迫型

細かいことにこだわり、人間関係を処理するのが窮屈なタイプ。官僚を生み出しやすい。他人に責任を転嫁しつつ自己の展開を試みる。

#### ○冷徹型

精神世界から感動が失われてしまうタイプ。

### ③Robert D. Dahl

「他からの働きかけがなければ、 $a$  がしないであろうことを、 $A$  が  $a$  に行わせることができたとき、 $A$  は  $a$  に対して権力を持つ<sup>2</sup>」。このようにDahlは権力の大きさを数量的に表そうとした。その際に出てきた式が以下：

$$M\left(\frac{A}{a} : w, x\right) = p(a, x | A, w) - p(a, x | A, \bar{w}) = p_1 - p_2$$

( $M$ : 権力の大きさ  $w$ : 働きかけ  $x$ : 行為  $p$ : 確率)

すなわち、 $A$  が  $w$  という働きかけをしたときに  $a$  が  $x$  という行為をする確率  $p_1$  と、 $A$  が  $w$  をしないときに  $a$  が  $x$  をする確率  $p_2$  の差として  $A$  の  $a$  に対する権力の大きさを表す。

### ●現代の民主的社会における権力—Who governs?

政治的資源が累積的不平等から非累積的・拡散的不平等へ変化した。

政治的資源は富、社会的地位、人気、情報などのこと。民主社会は必然的に不平等であるが、その不平等の形態が変化したということ。

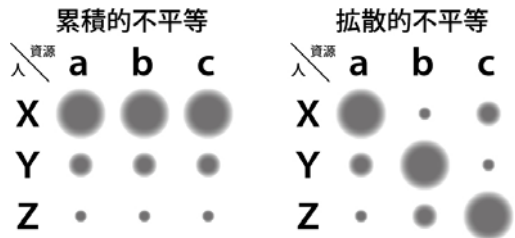
累積的不平等とは一部の人が全ての資源を大量持ち、その他の人々が全ての資源を殆ど持たないという状況。それに対し拡散的不平等は文字通り不平等が拡散しており、資源によって不平等の様子が違う状態。公的機関（政府）に影響を及ぼすための資源は様々な市民に利用可能であり、ある資源に接近するのに優位な人は他の資源については貧しいことが多い。また他の資源を支配するほどの強力な影響力を持つ資源は存

<sup>1</sup> 権力を追求したいという動機。成長過程での価値剥奪に対する補完の手段として権力を用いようとする。典型的には小さいときに身近な集団において挫折を経験したりいじめをうけたりする、など。

<sup>2</sup> 例えば、放つとくと誰も勉強しないが、先生が生徒に「勉強しないと卒業できないぞ」と脅かすことで生徒はしょうがないな、と勉強を始めるとき、先生が生徒に対して権力を持つということになる。

在しないし、何らかの影響を持つ資源を全く欠いている者（人だろうが集団だろうが）もない。

→多元的な社会集団がそれぞれ異なった範囲で限定された権力を分有している。そして争点領域ごとに影響力の序列が異なる<sup>1</sup>。このような政治体制は多元主義とよばれる。



#### ※Dahl の影響力の測定方法

政策決定において誰が出したどの案が採用、修正、却下されたのかを調べ、それによって成功・失敗の得点をつけていき、最終的に最も得点の高かったものが最も影響力を持つと推定した。

## (2)権力の様々な見方（様々な権力観）

### ①実体的権力観と関係的（機能的）権力観（丸山眞男<sup>2</sup>）

#### ●実体的権力観

「権力を人間あるいは人間集団が『所有』するものとみる立場、すなわち具体的な権力行使の諸態様<sup>3</sup>の背後にいわば一定不変の権力そのものという実体があるという考え方」

権力を「形あるもの」とみる考え方。この場合、権力は Rasswell のような「価値」ということになる。具体的には軍隊、富、人間的魅力など、そのような実体を持っている者が権力を持つ。

実体的権力観を唱えたのは他に Rasswell、Machiavelli、Marx<sup>4</sup>など。

#### ○問題点

AがBに権力を行使したとき、BがAの権力をどのように認識しているかによってBがAに従うかどうかは決まる<sup>5</sup>。よって権力の作用においては権力を認知する側の主観的なイメージ（価値のスケール）が重要になってくるため、実体としてだけでは捉えられない。権力を行使する側と行使される側の関係が大事なのではないか。

#### ●関係的権力観

<sup>1</sup> つまり、例えば経済政策における影響力の序列と治安政策における影響力の序列は異なる。ある分野において影響力を持つものが他の分野においても影響力を発揮するわけではない。

<sup>2</sup> 代表的な著作に『現代政治の思想と行動』がある。

<sup>3</sup> AがBに対して何かをやれ、と言った時に本当はBはやりたくないのにやる羽目になったとき。

<sup>4</sup> Marxはその「実体」を「生産手段」とであると説いた。

<sup>5</sup> つまり、Aが大きな権力を持っていてもBがそれを屁とも思っていなければBはAに従わない。

権力を具体的な状況における人間あるいは集団の相互作用において捉える考え方。きちんと機能を果たしたかどうかで権力を考えることから機能的権力観ともよばれる。代表的な学者に Dahl など。

BがAの影響力を受けることに内面的な意味づけ（納得）がなされているとき、AとBの間には安定的権力関係（支配関係）があるといえる。この結果、命令・服従が繰り返し生起する現象が起こる。

※別に実体的権力観が間違っていて関係的権力観が正しいというわけではない。重要なのは場合に応じて適切な見方をとること。

### ●歴史的状況と二つの権力観の結びつき

体制が固定的で階級的あるいは社会的流動性が乏しい国ないし時代では、実体的権力観が優位に立つ。政治権力の専制性・暴力性を強調する考え方（イデオロギー）と結びつきやすい。

一方、政治権力による社会的価値の独占性が相対的に低く、コミュニケーションの諸形態が発展し、社会集団の自発的構成とその間（及び国家と諸社会集団の間）の複雑な相互牽制作用が活発に行われているような国ないし時代では関係的権力観が強く、立憲主義・自由民主主義のイデオロギーと結びつきやすい。またそのような思想の強い西欧に発達した。

### ②一次元～三次元的権力観(Steven Lukes)

Lukes<sup>1</sup>はそれまでの権力観を一次元・二次元と整理し、新たに三次元的権力観を主張した。

#### ●一次元的権力観…Dahl など多元主義者の権力観

ある争点を巡る決定作成(decision making)の際に行使される権力に着目。その行動には諸利益（政治参加を通して示され、はっきりとした政策選好として捉えられる利益）の間の観察可能な紛争が伴う。

すなわち、AとBが争った結果Aの意見が通ったとしたら、Aの方に権力があるということになる。

#### ●二次元的権力観…Peter Bachrach & Morton Baratz

Dahl の考え方では決定作成という行動にしか注目しておらず、ある争点が取り上げられなかったことに（行動に表れなかったことに）権力が行使されたかもしれないのに、それを捉えることができない、と批判。

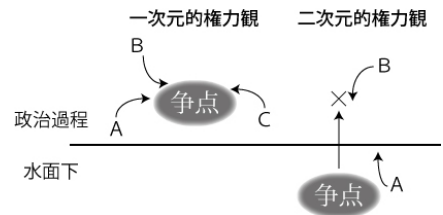
ある争点が政治過程に浮上する（政治の場での議論の対象となる）ことを抑制する（コントロールする）権力に着目。すなわち潜在的争点の顕在化を阻止するために決

---

<sup>1</sup> ちなみにLukesは権力を関係概念として捉えている。

定が回避される（「非決定」(non-decision)により決定作成の範囲が制限される）ことに着目した<sup>1</sup>。ここで政治過程から排除された人々は（政治過程にのらない）苦情と言う形で利益表明を

するとした。ここに諸利益の間の紛争（はっきりした政策選好と準政治的不満<sup>2</sup>の表明の中に具体的に示される利益）が観察可能である。



#### ○二次元的権力観の問題点

- ・行動論にとらわれすぎている。争点の排除は個人の決定だけでなく、集団の行動や政治上の慣行にもよる。
- ・観察可能な紛争に着目しているが、紛争が観察可能でなくても権力を使うときがある。AはBの欲求を自分の利益になるように形成することを通じて権力行使を可能にすることができ<sup>3</sup>、この場合紛争は観察不可能である。

#### ●三次元的権力観

人々の知覚・認識・選好を形成する権力に着目し、潜在的争点を排除。紛争が観察できないところでも権力関係が存在するとした。

その代わり権力を行行使する人々の利益と彼らが排除する人々の「真の利益」<sup>4</sup>との間に観察不能な（表出も自覚も意識もされない）「伏在的紛争」が存在する。

#### ③ゼロ・サムの権力観と非ゼロ・サムの権力観

##### ●ゼロ・サムの権力観

権力を行行使する側が行使される側から価値を剥奪するという考え方。AがBに対して権力を行行使し、Aが10の利益を得てBが10の不利益を被るとき、Aが+10、Bが-10であるからその和(sum)はゼロである。当然この間には紛争が生じる。

##### ●非ゼロ・サムの権力観

一定の権力行使によってAもBも価値を手に入れることがある。

#### ○Talcott Parsons

- ・機能論的社会システム論(AGIL)

全体的な社会システムはその機能によって4つのサブ・システムに分化している。

政治システム：集合的目標の達成(goal attainment)

<sup>1</sup> 例：大蔵省の予算編成権を内閣に移す計画が持ち上がったが、大蔵省の二次元的権力によってその計画はそれが争点になる前に予め抑えこまれてしまった。しかし1990年代になって大蔵省に対する社会的な批判が強くなると大蔵省は二次元的権力を失い、大蔵省から金融の権限を奪い取るべきだ（金融と財政の分離から）という争点が出てくると内閣府に金融庁が成立した。

<sup>2</sup> 政治的争点にならないことによる不満。

<sup>3</sup> 例えば某宗教では教祖にお金を渡すことによって教徒にとって利益があるというような教えをしたりする。

<sup>4</sup> これが権力を行行使される側の「主観的な利益」と対立するものである。

経済システム：適応(adaptation)…富の産出

制度システム：統合(integration)…単位相互間の協力を制度化

文化システム：潜在(latency)…単位の行為の動機を規制

→政治システムは集合的目標の達成をその機能とするが、そのためには権力が不可欠である。ここからPersonsは権力を「集合的組織システムの諸単位<sup>1</sup>による拘束的義務の遂行を確保する一般的能力」「集合的目標を達成するために社会の資源を動員する能力」と定義した。

#### ・貨幣とのアナロジー

一方における権力の増加がもう一方における権力の減少を意味するものではない。むしろ権力の総量が増加するので、双方の権力は共に増加する。これを貨幣とのアナロジー（類似）で説明した。すなわち、経済システムにおける貨幣が政治システムにおける権力である。権力も貨幣も一般化された（特殊な状況ではなく一般に利用可能な）<sup>2</sup>象徴的媒体（実体を持たない、価値の象徴）である。そして権力も貨幣と同じように信用創造<sup>3</sup>によって増加するものである。

銀行は預金者からの信用をもとにして信用創造をすることができるが、同じことが権力にも言える。すなわち政府は国民からの信頼があるために、実力以上の権力<sup>4</sup>を利用することが可能なのである。これにより、政府は権力のゼロ・サム状態に陥ることなく集合的目標を達成することができる。すなわち、公共の利益を実現できる。

信用創造（支払準備率 10% の場合）



#### ○Hannah Arendt

Arendt は権力を「人間が集まって一致した活動をする事」「共に活動すること」と定義し、また次のように述べた。「権力は個人の所有物ではない。権力は集団に所属し、かつその集団が集団としてのまとまりを持ち続ける限り、常に現れるものである。我々は誰かのことを『権力の座にいる』というとき、そこに実際に意味されているのは、彼が何人かの人々から彼らの代表者として行為する権利を付与されている、ということである」。

また、暴力は政治権力の延長ではなくむしろその破綻である。なぜなら暴力は説得・相互信頼に基づいて共に活動するということの破綻であるからである。つまり

<sup>1</sup> 個々の人間集団と考えてよい。

<sup>2</sup> そもそも貨幣が登場した背景は、物々交換では特殊な状況でしか成立しえなかったものを、貨幣というものによって一般化させた、というものである。

<sup>3</sup> 支払準備率を $r$ とすると $\frac{1}{r}$  倍の貨幣が流通することになる。詳しくは高校の政経の教科書でも見てください。

<sup>4</sup> 実力は現金に、権力は貨幣に、それぞれ対応する。

権力は人々の合意に基づいて公共の利益を実現することである。

## ●人間行為の三類型

### ○労働(labor)

肉体の生物学的な過程に対応する生命維持のための行為。日常の反復的行為であって、私的な行為。自然的行為。

### ○仕事(work)

理念を対象化して人工物（耐久性をもった構築物）の世界を形成する行為。美・卓越性を行為の価値基準としてもっている。非自然的行為。

### ○活動(action)

自然や事物と孤立して対峙するのではなく、複数の人々との関係性において成り立つ自発的な行為様式。協働を基盤とした常に集合的な行為であり、自由な創造的行為。政治の必要条件であり、最大の条件。

Alendt の理想は古代ギリシャのポリス。自由人たちがお互いに関係を結びながら政治的な営みをしていた。すなわち活動が優位にあった。ところが近代産業化の段階では仕事が最高の価値を獲得するようになり、大衆消費社会が到来すると労働が最上位になった。このような社会の下では人間の生命維持・拡充が最高の行為となってしまった。

政治は本来自由で平等な市民がロゴス<sup>1</sup>を媒介として公共の事柄に関わっていくような集合的活動だったがもはや労働が最上位に来てしまうような現在の政治ではそのような社会は期待できず、政治は自由な集合的活動ではなく画一的な行動を基本とする技術的な管理業務になってしまう。

※権力にはゼロ・サム的な面と非ゼロ・サム的な面との二面性があることに注意。

## ※一般の権力と比べた政治権力の特徴

- 一時的なものではなく持続的なものであるということ
- 客観化された制度的なものであるということ
- 一定地域内の全員に服従を要求する（一定領域内での物理的強制力を独占する）ものであること
- 正当性(legitimacy)が大事であること
- 公共性が大事であること<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 理性、言葉という意味合い。

<sup>2</sup> 政治権力はそれが公共の利益を実現する限りにおいて正当性を持つ。